

## 古英語の本文批評と *Beowulf* (15)

網 代 敦

本『論叢』のNo. 43 (2012) からNo. 48 (2017) において、Dietrich (1859) から Neidorf (2016) までの「古英語の本文批評の変遷」を検討し、続いてNo. 48 (2017) からNo. 50 (2019) においては、Nickel (1972) から Neidorf (2017) までの近年に特化した「*Beowulf*の本文批評の変遷」を辿ってみた。今号ではこれらを統合して年代順に配列し、各主張者の姿勢の主要点を改めて簡略にまとめ直した。その後で、本文批評の各主張の抛り所や背景的要素は何かなどを考えてみたい。これまでの『論叢』では取り入れられなかった論文も新たに数点追加したのがある。本文校訂における保守主義者は (C)、本文に積極的に介入する姿勢を是とする者は (I)、特にどちらかに傾倒する訳ではなく中立的な姿勢を示すものは (-) で示してある。ハイライト部分は *Beowulf* のみの本文批評に関するもの、アスタリスクを付しゴシックで示した欄は、本文批評の新しい展開の切掛になるとと思われるトピックを示す。

### 4 「古英語作品の本文批評に関する諸議論の展開」<sup>321</sup>と「1932年以降の *Beowulf* の本文批評変遷」

---

321 この項目における以下の記述は、網代敦『古英語作品の本文研究をたどって古英詩 *Andreas* の写本・刊本・日本語散文訳』（平成25年度人文科学研究所報告書、大東文化大学人文科学研究所、2014、pp. 11-23）で取りまとめた内容も加味しながら、全体を簡略にまとめ直したものである。追加した論文も数点ある。

*1830	B. Thorpe J. M. Kemble			イングランドにおける The New Philology の始まり
1859	Dietrich	C		古英語の本文批評史の草分け。写本本文を救うこと (zu retten)、不当に奪われた本文を元に戻すこと (zurückzustellen) の必要性を説く。
1910	Tupper	C		「未熟な推測 (premature conjecture)」や「全くの当て推量 (arrant guesswork)」に警鐘。写字生を信頼。Cynewulf 作品に大胆な修正を施した Trautmann (1907) を批判。
*1931	Krapp (& Dobbie)			古英詩の標準テキストを目指した <i>ASPR</i> (1931-53) のテキスト刊行始まる。
1932	Hoops	C		写本本文尊重派の代表。修正は韻律のみの観点からなされるべきではないと主張。推測による修正は控えるべきとする。Trautmann (1907) を批判。( <i>Kommentar zum Beowulf &amp; Beowulfstudien</i> )
*1933	Kuhn			Kuhn の法則。「古ゲルマン語における語順と語強勢の関連」
1938	Hulbert	C		<i>Junius MS.</i> に的を絞り、古英詩は本文修正をせずに校訂本を出版することを主張。Krapp (1931) は不必要な修正や変更がある。Blackburn (1907) の保守的校訂を評価。
1946	Sisam		I	同一作品に対する二写本間で本文異同がある場合がある。写字生は忠実な本文転写を期待されてはいなかったと断定。古英詩の写本はオリジナルを正確に写し出した完全無欠なものではなかった。本文介入に正当性を見る。
1948	Andrew		I	写字生は韻律構成への関心が希薄。写本本文を作者の意図したものに復元することが校訂者の第一の役割である。
1959	Brook	C		<i>ASPR</i> (1931-3) に見られるような本文の標準化を批判。後期古英語テキストにおける語形の標準化は、中英語に向かっの漸次的音変化の過程を覆い隠してしまう。
1968	大場	C		Hoops (1932) の保守的姿勢を支持。本文の主観的な修正を排除し、写本の実態を尊重すべきである
1969	Kane		I	推測による修正の正当性を主張。校訂法の体系を確立することの重要性を説く。
1972	Nickel	C		Holthausen による <i>Beowulf</i> 第 8 版 (1948) の改訂における編集作業を通し、その問題点を概観している。できる限り写本の読みを尊重。
1973	Gneuss	C		本文批評の原理原則の構築を提案。校合されるべき全写本の調査の必要性を説く。但し、残された写本は唯一のものが多いため、写本通りに本文を再現するという保守的姿勢を継続した方が良いとする。 <i>A Plan for the Dictionary of Old English</i>

1976	Boyle	—	—	本文批評における‘optimist’と‘recensionist’の姿勢を明確化。諸写本を一つの総合体と見なし、写本間の不一致を解決するための一手段として‘stemmaticum’を構築する。テキストの伝統を明確にし、テキストが逸脱する前の状態を明らかにすることを主張する。
1977	Rigg	—	—	写本文の本質・伝達状況や写字生の転写法とその目指すところを把握すべきである。
1977	Godden		I	今後のテキスト編纂・校訂上の諸問題を指摘。従来の転写本や初期刊本の比較を通しての本文受容史の理解、本文の異読・異形が生じた経緯の解明、写字生・読者の本文介入への実態の分析などを重要点とした。これらを考慮し、校訂者は写本文に介入をすべきか、写本に見られるエヴィデンスの正確な記録者であるべきかを問う。
1977	Blake	C		‘manuscript context’への配慮。校訂されたテキストに見られる文字の標準化、頭韻構造に従った半行構成の詩形の採用、現代の句読法の導入などに異論。特に「統語的機能」を表示する現代の句読法の導入は、古英詩の文体を損なう危険性があるとする。
1980	Mitchell	C		「統語的機能」を有する現代の句読法の導入を古英語の韻文と散文に導入することに不賛同。古英語の韻文・散文は書き言葉というよりも、話し言葉に近いリズムを持っているので、現代の句読法を用いることにより硬直した統語構造に改変された文体では、それらのニュアンスを反映することはできない。古英語では、現代の句読法に代わる別手段として、「連辞省略的並列構文」、「共有構文」、「句またがり」などの語法が用いられていることを明らかにしている。句読法に関し EETS への提言。
1981	Busse	C		校訂者の「想定・憶測」の問題を取り上げる。「事実とすべきこと」と「想定とすべきこと」の客観的な区別を認識することが重要。古英詩の本文に関し、これまで当然とされてきた見解を見直すべきである。韻律に基づく修正に疑問。
1981	大場	C		本文介入は校訂者の「作為」。現代の句読法導入に反対。
1981	Kiernan	かなり強いC		第一、第二写字生ともに転写後に校閲を行っている。後者は自分のパートと同時に、前者の転写部分も校閲している。よって写本はかなり信頼性があり、本文修正を施す必要はない。韻律の崩れの部分は、写字生の転写間違いということではなく、‘intelligent variation’と見做すべきで、頭韻が本文修正を行う上で絶対的な要素にはならないと説く。
1982	Taylor-Davis	C		写本に見られる頭韻の欠損・不成立の個所において、従来なされてきた「頭韻の修復」には検討が必要である。異音 (allophone) を用いて頭韻が構成された可能性もあるからである。頭韻を規則化する「修正」は本文を「修復」することにはならない。

1983	酒見	C		写字生の間違いが明確化されないうちは、保守的校訂の姿勢を重んじる。
1984	Stanley	C		1000年以上前の古英語の韻文テキストは、唯一の写本にしか残されていない場合が多い。よって、校訂者の本文介入には否定的である。というのも、現代の校訂者より写字生の方が‘living Old English’をよりよく知っていたからである。写本本文の‘Rettung’を強く支持。
1984	酒見	C		酒見 (1983) の継続。
1986	酒見	C		酒見 (1983, 1984) の継続。
*1986	Angus Cameron et al.			<i>Dictionary of Old English: D</i> (microfiche 版) 刊行開始
*1990	Manchester Conference			The May 25-27, 1990 conference on ‘The Editing of Old English Texts’ held at the University of Manchester
1990	O’Keeffe	C寄り		写字生は写本本文の詩を完成された作品とみなしているのではなく、転写の際に自ら書き換えをしながら本文伝達に参与していったとみる‘scribal version’が最終のものとなり、写本本文はそれ自体正当性がある。それ故、オリジナルの本文復元を求めて本文介入することは再考されるべきである。
1990	Frantzen	C		第一に‘manuscript context’に立ってのテキスト編集が優先されるべきである。
1990	Duggan		I <sup>322</sup>	Kiernan (1981) の見解に異を唱えている。写字生の転写において、どこを修正したかは判断できるが、どの間違いを修正しなかったかは判別できない。また、写字生の転写本が詩人のオリジナルをどの程度正確に反映しているかも不明である。Kiernan (1981) が行ったように、写本に認められる修正や削除の数量をいくら示しても、それが保守的校訂を支持する根拠にはなり得ない。
1991	Lapidge		I	古英語の本文批評に関する理論的議論が欠如している。実際のところ、古英語詩の写字生は転写の際に本文の作り変えを行っているところから、写本は‘scribal version’である。よって、写本を重視しすぎるあまり、作者をこの‘scribal version’に隷属させてはならない。‘manuscript-oriented’ではなく‘author-oriented’であるべき校訂を主張。
1992	Moffat	C		ギリシャ・ラテンの多資料に基づいて確立された古典テキストの場合の本文批評の実践とは異なり、古英語作品の場合はコーパスが小さい。それ故、伝統的な本文批評は望めない。
1993	Lapidge		I	写本本文をそのままにしておくことは、本文編纂上の義務の放棄である。校訂者の義務は原作者が実際に書いたものを確立することである。

322 当初 (拙論 (12, 2017, p. 25) では、Duggan の姿勢を中立的な (-) と示したが、(I) に訂正する。

*1994	Scragg and Szarmach			Scragg and Szarmach (eds.) <i>The Editing of Old English: Papers from the 1990 Manchester Conference</i>
*1994	Robinson			Robinson's essay collection: <i>The Editing of Old English</i>
1994	Rumble	—	—	古文書学 (paleography) の正しい知識と理解が校訂作業には重要。本文介入の際は書記的構成要素の解明が求められる。
1994	Lapidge		I	古英語の本文批評を理論的に扱ったものはほとんど見られない中で、保守的傾向が強くなってきている現状である。もう少しバランスのある校訂姿勢が求められるべきである。‘emendatio’は必要不可欠。(the 1990 Manchester Conference)
1994	Magennis	C		教育的な立場から、‘student edition’はどうあるべきかを追求している。写本の‘textuality’を忠実に反映させると同時に、読者とテキスト間に障害を生じさせないようにする。綴りの標準化は初学者には適切だが学習が段階的に進んでいく上で止めていく。本文修正はできる限り行わないというのが現行の研究者の間で通用している一致点であるとする。
1994	O’Keeffe	ややC寄り		古英語の写本は「残存的口承文化」によって深く影響を受けた、現代と異なる‘literacy’の形態を留めている。いふなれば‘orality’の要素が残る。校訂において本文を標準化してしまうことは、この特徴を消し去ってしまうことになる。(the 1990 Manchester Conference)
1994	Scragg		I	20世紀になっても、理論的本文批評の確立ができていない。校訂者は、作者、本文、写字生、歴史家、学生(研究者)に対してその責任があるので、保守的姿勢に止まらずに本文介入を肯定する。但し、どこまで本文介入をなすべきかの同意が必要であるとし、本文介入の対象となる「修正」の2つのタイプを区別した。その一つは、「綴りと文法の標準化における修正」と、もう一つは「意味に基づく修正」である。Lapidge (1991)の主張に同調。(the 1990 Manchester Conference)
1994	Robinson	CとIの間		積極的本文介入者よりも保守的だが、極端な保守主義には賛同しない。写本の信頼性を問題視。Robinson's essay collection
1994	Niles	C		本文に見る‘orality’の要素を尊重。原則に捉われない韻律上の自由さなどを「人間の声の可能な標示」として捉え、規範による一様化を控えることを主張。韻律という枠にはめた本文修正への疑義。
*1995	Greetham			Greetham (ed.) <i>Scholarly Editing: A Guide to Research</i>
1995	Hall	—	—	校訂における派を、Platonic派(liberal)とStoic派(conservative)に区別し、従来の校訂者はPlatonic Stoicsであるとした。両者の主張の折衷化は必要であるものの全面的には賛同できないことを表明している。一方、近年の校訂者は、妥協的ではなくStoicであると断定している。多様なアプローチによる校訂テキストの提言。 <i>Scholarly Editing</i>

1996	Fulk	/	I	保守派の理論的原則の希薄を批判。韻律の統計基盤を尊重し本文確認をすることを主張。
1997	Donoghue	—	—	近年における傾向として、経験主義を重んじる <b>philology</b> と理論志向の <b>linguistics</b> の共生が見られるようになってきた。後者はどのように前者が行ってきた本文批評の場に足を踏み入れることができるか、コーパス研究や社会言語学的アプローチなどからその可能性を探る。
1997	Szarmach	—	—	本文復元の過程は、「理論」と「方法論」が必要であるとする。しかしながらまだ理論的原則の到達に至っていない。ただここ 10 年程の間に、本文批評の目的と方法論が意識されるようになった。写本本文の破損・断絶箇所における本文介入は、頭韻・韻律が必ずしもその問題を解決する手段にはなり得ない。本文への介入主義者と非介入主義者の論争は、その噛み合うところが必ずしも明確化されていない。
1997	Page	—	—	写本には、これまで十分に校訂本に取り入れられてこなかった関連情報が含まれている。即ち、'verbally' ではなく 'visually' に残されている情報（それぞれの語間に見られる微妙な <b>spacing</b> の差, <b>punctuation</b> , <b>pointing</b> など）にもっと注意を向けるべきことを主張。
1997	Robinson	CとIの中間	/	Klaeber (1950) の第 3 版は <i>Beowulf</i> の言わば 'an established text' として、読みの問題や全体的構成の捉え方を 'dominate' してきた。この校訂本が詩のテキストに関する考えを固定化・限定化してしまう危険性に警鐘を鳴らしている。
1997	Fulk	/	I	'liberal emendation' の擁護者は 20c. 初期までにその姿勢が覆されてしまった。'moderate' から 'conservative'、さらには 'ultraconservative' へと変容してきている。確率を考慮しながら理知的に本文批評上の決定をなすことが肝要である。本文決定に際し、韻律から得られる確率を尊重し積極的に本文介入をする姿勢をとる。 <i>Beowulf</i> の本文を調査すると、半行間の頭韻結合が欠如している箇所が 37 あり、そのうち 23 において修正すると韻律・文法・意味における改善が見られる。このような頭韻上の変則が、敢えて効果を狙った作者の意図としてオリジナルのテキストに残されているとは考えにくいとし、Niles (1994) の見解とは異にしている。と同時に、O'Keefe (1990) や Franzen (1990) の保守的姿勢にも受け入れがたい態度を示している。
*1998	Keefe and O'Keefe	/	/	Keefe and O'Keefe (eds.) <i>New Approaches to Editing Old English Verse</i>

1998	Irving Jr.	I	写本のレイアウト、句読点、節分割、大文字化、挿入画、語と語の 'spacing'、欄外の書き込みといった本文以外の情報に、近年より大きな関心が寄せられて来ている。これは写本の用途などを知る上で有益な要素である。Mitchell の <i>OES</i> (1985) により統語と韻律の関係が明らかになり、本文修正に大いに貢献できることを確認している。古英詩は形式に則り規則的であったので、韻律の崩れは修正すべきとする。古英詩の本文編纂において、詩を当時の状態のままに提示するのか、あるいは今日の読者がまだ体験できるものとして、詩の中に生き残っている特質を引き出す努力をするのかの問題を取りあげ、後者の立場がないがしろにされてきたと判断している。 <i>New Approaches</i>
1998	Doane	C	古英詩の本文を、韻律行に一致させ配列するという現代の 'textuality' に基づく方法は、古英詩の本文を文法的・統語的に随意的な単位に分断してしまい、理解をより難しいものにするを指摘する。語の 'spacing' が多様であること、自由な形態素に語を分割していること、不規則な句読法などは、本文に 'orality' の特質が反映されているとする。即ち、修辭的な休止、語強勢、音の高低や大きさを表すものであると捉えている。これを 'a speaker-based textuality' と呼び、現代の書式概念に基づく編纂法に置き換えてしまうことに異議を唱えている。 <i>New Approaches</i>
1998	Scragg	—	Scragg (1994) では (I) の姿勢を示したが、ここでは a new <i>ASPR</i> の編纂の企画と、校訂法の再考の提案に焦点を置いている。数点のみ編集方針を指摘すると、古英詩において半行分けの現代の印刷は、写字生によるものではないことを自覚すべきとし、本文校訂というものには写本に見いだされる証拠と、校訂者自身が介入した部分とを区別しておくことが肝要であるとする。また、a new <i>ASPR</i> は写字生が関与した個々の作品全体を考慮した校訂版となることを掲げている。 <i>New Approaches</i>
1998	Gneuss	C	<i>DOE</i> 編纂に伴う Gneuss (1973) の提言に対する新たな主張。1973 の時よりも編集方針と本文批評へのさらなる関心の高まりが認められることを指摘する。「保守派 (代表は Henry Sweet) と急進派 (代表は Kenneth Sisam) の対立は実際のところ存在しなかった」とする。保守派といえども現代の句読法を導入しているからである。また句読法の新しい体系を展開することを唱導する学者もいる。これは一見、急進的な見方と捉えられがちであるが、実際は写本の句読法を何ら変更することなく校訂本に反映することができることを明らかにしたものである。進歩的に思えることが、実際にはよく確立された保守主義の校訂法であったという、パロドクスである。Gneuss 自身は、理論よりも伝統的で経験主義的な校訂法を重んじている。
*1999	Kiernan	強い C	CD版 <i>Electronic Beowulf</i>

1999	Caie	CとIの中間		古英語作品を校訂するほとんどの者は、校訂における実践方法の具体的提示を行っていないと指摘する。超保守主義者と行き過ぎた本文介入者の中間を行くことを目指し、校訂者の役割は、中世の時代の写本文を目にした者（写学生）と現代の読者の仲介者であるべきことを考慮しなければならないとする。‘a scholarly edition’ と ‘a student edition’ を統合し得る ‘electronic editions’ の有用性を提言している。
1999	Görlach	—	—	本文決定においては、「本文の制作・伝達、文法・文体に関する知識」などを総合的に考慮することが重要であるとの再確認。
2000	小野	C		校訂本はあくまでも校訂本であるところから、最終的には写本に依拠することが大切である。但し、写本の言語が作者自身の言語を投影しているとは限らない。
2001	寺澤 <sup>323</sup>	—	—	テキスト編纂の場合には写本にない情報が加わったり、本来写本にあった重要な情報が失われたりすることがあることを指摘。
2003	Orchard		穏健なI	写学生により伝達された読みを捨てることに警鐘を鳴らす Stanley (1984) と、古典テキストの確立に機能した路線に立っての思慮深い修正を奨励する Lapidge (1991; 1993) の代表的な議論の対立を取り上げている。また保守的姿勢を強く打ち出している Kiernan (1981) や Niles (1994) に触れながら、これらの保守主義者による校訂本の中にも暗黙のうちに写本文変更（現代の慣例通りの行配列、大文字化、句読法においてなど）がなされてきたことを指摘する。推定による本文修正を行う際は、本文の範疇のみに特化した ‘textual context’ だけにとられず、同時に ‘manuscript context’ というより広い観点からも考慮すべきである。高画質のファクシミリなどの使用により、推定による本文修正を促す可能性が高まっていることにも言及。 <i>A Critical Companion to Beowulf</i>
2003	Fulk		I	本文修正が必要であるか否かを決定する際の原則に関する議論がない。古英語のテキストを取り扱う際に、本文修正をすべきか否かの判断は、‘probabilism’ という客観的な視点に立つて行うことが重要である。例えば、「古ゲルマン語における語順と語強勢の関連」を扱った Kuhn の法則などは確実性を与えてくれるものである。頭韻規則と統計的に見て規則性のある韻律規則は、 <i>Beowulf</i> の詩行構成には絶対的なものであると見做される。本文編纂のようなフィロロジカルな実践には、韻律から得られる確率性を無視してはならない。そういう意味で、Kiernan (2000) の electronic 版で提示された読みの多くは拒絶されるべきである。

323 寺澤盾「古英詩の写本とテキスト」宮下志朗、丹治愛（編）『シリーズ言語態3：書物の言語態』（東京大学出版会，2001）pp. 111-129.

2005	Fulk	/	I	Klaeber (1950) の改訂に当たり、最も異論の多い写本上の読みに解決を与え、本文を決定する。そのために頭韻と韻律に基づいた本文修正の必要性を強調。Kiernan の <i>Electronic Beowulf</i> (2000) の読みの姿勢に改めて異議を提示する。
2006	Donoghue	/	C	現代の句読法が古英語にそのまま導入されているが、その是非がほとんど検討されていない。古英語で文の終結が判然としない場合に、特にセミコロンが多用されている。これにより「曖昧な途切れ」を示すことが可とされるが、古英語の統語関係に合致するとは限らない。 <sup>324</sup>
2006	Muir	—	—	古英詩の本文は ‘oral traditions’ の影響下にあるので、本文の権威が強く意識されるものではなかった。本文自体は写字生により広範な改訂や修正を受けてきた。古英詩のように自国語で書かれた作品は、写字生や読者や修正者により ‘modify, correct, annotate, update, punctuate’ される共有の文化的作品であった。よってオリジナルのテキストを再構成するのは難しい。
2006	Liuzza	—	—	ほとんどの古英語テキストは唯一の写本にしか残されていないということから、校訂者は ‘the optimist’ となり、写本尊重を主張する。これにより本文修正に対して強い抵抗を示すが、実際校訂本においては、パングチュエーションは現代のものが導入されている。保守的な批評テキストといえども、多くの小さな本文介入が見られる。写本自体は写字生により新しい ‘version’ に書き換えられている。そうすると写本の ‘authority’ ということをどのように捉えたらよいかという問題を提示し、本文介入の是非を問うている。O’Keeffe (1990) の「写字生はテキストを新しいコンテキスト用に作りかえている。テキストをそれぞれの ‘material contexts’ において読むことが重要である」という見解を再認識し尊重する。
2007 (a)	Fulk	/	I	本文校訂は ‘philological probabilities’ に基づいてなされるべきことを主張。「音韻論・形態論・統語論・意味論・語彙論・古書体学・韻律・頭韻・語りの文体・文化的コンテキストに於いてのテキスト解釈」など総合的な視点が必要だとする。
2007 (b)	Fulk	/	I	「本文の取り扱いにおいて原則をどう定めるかの詳細な説明を示すこと」を強調する。具体的には、本文修正において ‘statistical basis’ の重要性をここでも説いている。韻律パターン統計資料から得られる確率は、詩行の構成不備や崩れを見極める上で客観的な判断根拠を与えるもので、頭韻上・文法上観点からの判断と同等か、それ以上の信頼性を与えるものと見做している。

<sup>324</sup> Daniel Donoghue, ‘A Point Well Taken: Manuscript Punctuation and Old English Poems’ in *Inside Old English: Essays in Honour of Bruce Mitchell*. Ed. by John Walmsley (Oxford: Blackwell, 2006), pp.38-58.

2008	Fulk, Bjork & Niles			<i>Klaeber's Beowulf</i> (Fourth Edition)
2009	Treharne	—	—	写本の 'textuality' の問題や、現代におけるデジタル化、画像化された写本やテキストの問題を考慮しながら、テキスト編纂上の方法論について問い直す必要性を説いている。問題視している点は、「テキストというものを構成する要素は一体何であるか」という問いに目を向けずに、本文批評が行われ批評的と称する校訂本が作成されてきたことである。校訂という視点から中世のテキストをどのように取り扱い、多様な読者に向け文学作品を如何に再構成すべきかに主眼点が置かれた論集、 <i>The Editing of Old English</i> (Scragg, 1994) においても、この域を脱していないとみる。テキストとはデジタル上に映し出された単なる複製ではない。時代を通して付加・変更・改作を受け作り上げられてきた、言わば建築物に例えられるものとして、'architextuality' の概念を導入したテキスト論を展開している。
2009	Shippey	—	—	<i>Klaeber's Beowulf</i> (第4版, 2008) の書評を与えながら、この版の校訂上の成果を明らかにしている。本文批評においては、特に韻律と頭韻への言及が多であることを指摘している。 <i>Beowulf</i> の唯一の現写本の正確性を主張した Kiernan (1981) の見解を否定し、写本を 'an authorial copy' とは見做さない第4版の校訂者の姿勢を浮き彫りにする。Fulk の韻律と頭韻という観点からの修正派の台頭が近年に見られることにも言及する。
2011	Terasawa		穏健な (I)	特に近年の古英詩の編者には保守主義の傾向が見られる。即ち韻律の観点のみに基づく本文修正への躊躇いがあることを指摘する。韻律的に好ましいように読みをむやみに修正する必要はない。しかし本文の崩れがあるか否かを判断する決め手として、統計的に確認された韻律パターンに当てはめることは有用であるし、確率の高い修正上の根拠を与えてくれるとする。
2013	Neidorf		I	写字生は <i>Beowulf</i> に見られる英雄伝説の諸伝統に精通していないことから、固有名詞を誤読し、普通名詞に書き換えてしまう場合が見られる。これが意味するところは、現存する写本は数世紀前に作成された原作を転写したもので、Kiernan (1981) が主張するような原作との時代的一致を示すものではない。ましてや、写字生 B が 'quasi-authorial status' を示すものではないと断定している。最終の写字生ではなく、それ以前の写字生が転写した際に誤記を持ち込んでしまったことも考えられる。いずれにせよ、このような誤りがある以上、校訂者による本文介入の必要性は正当化されるとする。

2016	Neidorf	I	<p>Sievers (1893) の韻律論を改めて評価し、古英詩の本文批評に適用することを再主張する。古英詩は規則的韻律パターンに従っているので、‘unmetrical verses’ を標準の韻律に修正すべきである。この ‘unmetrical verses’ は写字生の間違いと断定した Fulk (1996) の意見に、Neidorf も賛同している。同一作品が残されている複数の写本において、共通の ‘genuine unmetrical verses’ が認められるなら詩人が文体的効果を狙った意図も考えられるが、調査からはそれを証明する可能性は低いと Neidorf は断定する。それ故、「韻律的欠陥」と「写字生の転写上の間違い」の間には相関関係があるとし、韻律学の客観性をさらに重要視すべきであると説く。</p>
2017	Neidorf	I	<p>原作である <i>Beowulf</i> の本文が、1000 年以降に作成された唯一の写本の制作年との間に、写字生を通しどのように伝達されてきたか、言語的側面、文化的変化の観点、そして写字生自身の行為の面から明らかにしようとする。300 以上の写字生による間違いが本文に入り込んでいる。まずは、このような表層的本文の改悪を取り除くことが校訂者のなすべきことであると述べる。例えば、<i>Beowulf</i> のような古英詩の韻律は非常に規則的であるので、韻律上不規則な部分は写字生の誤りに起因しているものであり、積極的な修正を提案している。韻律の崩れや頭韻の欠如部分には詩人の ‘artistic purposes’ が意図されているという見解は正当ではない。韻律と頭韻に則った確率性の高い客観的な基準に基づいて本文批評に臨むべきであるとする。Kiernan (1981), Stanley (1984), O’Keefe (1990), Doane (1994) らの考察に疑義を提示し、長いこと浸透してきた ‘editorial conservatism’ の姿勢を正そうとしている。</p>

## 5 まとめ

ギリシャ・ラテンの古典語作品における本文批評は、写本研究が進んでいる点からかなりの伝統を持ち、原理原則も確立している。それに対して古英語作品においては、当初、理論的方法論が十分ではないと指摘されてきた。この要因はイギリス人が本格的なアングロサクソン文学・語学への認識が遅れたこと、本文研究における比較言語学的成果の導入が十分機能していなかったこと、さらには写本研究の立ち遅れにあると思われる。ただ近年に至っては、いろいろな提案によりかなり是正され、方法論が整ってきたと言える。特に古英詩の校訂本においては精査を極めた critical edition が刊行されてきた。その中で

校訂法に関する2つの派の「せめぎ合い」が行われてきたのが、上記4でまとめた本文批評史を見ることから明らかであろう。改めて述べると、その2派とは写字生を信頼し写本本文の読みをできる限り保持しようとする「保守派 (conservative)」と、本文に崩れが認められる場合は積極的に本文介入し修正して行こうとする「介入派 (interventionist)」である。この展開を左右するきっかけがその都度いろいろな形で現れている。その点にも簡単に触れながら、全体のまとめを行いたい。

イギリスに本格的な比較言語学、ゲルマン語学の成果が導入されたのは、Benjamin Thorpe (1782-1870) と John Mitchell Kemble (1805-1857) によるとされ、それをもってイングランドの ‘The New Philology’ の幕開け (1830年)<sup>325</sup>となる。一方18世紀において文学史面に目を向けてみると、この時期最初に挙げるべき人物はオックスフォードの詩学と歴史学の教授であり桂冠詩人でもあった Thomas Warton (1728-1790) であろう。Warton は3巻からなる英詩の歴史書 (1774-81)<sup>326</sup>を著した。但し古英詩への言及はほとんどなく、中英語で書かれた韻文ロマンスが中心であった。とは言え中世再発見の流れに参与した一人に変わりはない。イギリスの中世主義・中世復興が始まったのは1760年代<sup>327</sup>とされ、これまで等閑視される傾向にあったアングロサクソン文学が注目されるようになってきた。その道筋をつけるのに役割を担ったのは中世を研究する歴史家であり、その中の一人が Sharon Turner (1768-1847) であったと言えよう。Turner は1799年から1805年にかけて4巻からなる大分なアングロサクソン史<sup>328</sup>を刊行

<sup>325</sup> Haruko Momma, *From Philology to English Studies: Language and Culture in the Nineteenth Century* (Cambridge: Cambridge University Press, 2013), pp. 60-94.

<sup>326</sup> Thomas Warton, *The History of English Poetry, from the Close of the Eleventh to the Commencement of the Eighteenth Century*, 3 vols. (London, 1774-81).

<sup>327</sup> マイケル・アレキサンダー (著)、野谷啓二 (訳) 『イギリス近代の中世主義』(白水社, 2020), pp. 25-6, p. 43.

<sup>328</sup> Sharon Turner, *The History of the Anglo-Saxons*, 1st ed., 4 vols. I (1799), II

した。アングロサクソン文学は Vol. IV の Book VI (pp.343-443, 1805) で取り扱われていて、抜粋であり正確性に欠けるところがあるが *Beowulf* の初めての現代英語訳<sup>329</sup>を与えている。

このような状況を経てこれ以降、古英語の文法書・辞書の編纂と同時に韻文・散文テキストの編纂が活発になってくる。テキスト編纂ということになれば当然、写本との関わり合いで本文批評の問題をどう取り扱うかの論議が生じる訳である。Dietrich から Hulbert までの初期の本文批評の姿勢は保守的である。Dietrich の場合は、*Beowulf* テキストを編纂した Thorpe (1855) と Grein (1857) の自由な本文修正への批判から、Tupper (1910) や Hoops (1932 の二著) の場合は Cynwulf 作品に大胆な修正を施した Trautmann (1907) への批判から写本の保守的な読みを提唱している。この Hoops の二著以降、*Beowulf* の本文批評の考察が大きく展開していく契機になったと考えられる。これらの保守的傾向に対し、Sisam (1946) は写本がオリジナルの作品を高い正確性をもって再現しているという確証はないと主張し、本文介入が正当である根拠を示した。この論争の間であって古英詩テキストの標準版を目指した *ASPR* (1931-) が刊行され始めた意義は大きい。またこの標準版をめぐって Brook (1959) のような新たな見解が生じ本文批評の論議がさらに高まってくることになる。Andrew (1948) は韻律構成のことに言及している。これは古英詩における半行構成と韻律の関係を法則化した Kuhn (1933) の理論に触発されるところも大きかったのではないかと思われる。1960年代は Langland の *Piers Plowman* のテキストを編纂した、本文介入派の George Kane (1969) の参入が注目を引く。Gneuss (1973) は古英語

---

(1801), III (1801), IV (1805).

<sup>329</sup> Turner とその *Beowulf* 訳については、以下の拙論を参照。Atsushi Ajiro, “Sharon Turner, a Historian of Anglo-Saxon England and *Beowulf*” in *An International Journal of Linguistic-Literary Studies: POETICA - Special Issue: The Study of Old English in Nineteenth Century Europe*. Maruzen-Yushodo Co., Ltd. 86, (2016, 1-21).

辞典の刊行に先駆けて、資料としての校訂本編纂における具体的基本原則の構築を提示し、これ以降本文批評の原理原則の確立が大きな焦点になって来る。Godden (1977) も同様な見解にある。その後、Blake (1977) から Frantzen (1990) までは保守派の主張が主流をなしている。Blake と Mitchell (1980) は現代の句読法を古英語に導入することに反対し、写本コンテキストを重要視することを訴えている。Busse (1981) は韻律に基づく修正に疑問を抱いている。古英語の詩人は頭韻についてはもちろんのこと、韻律をかなり規則的に守っていたはずで、そのパターンから外れている場合は例外とは考えられないので韻律の標準パターンに修正すべきという見解は、「事実」か「想定」かの判断が下されていないままの決定であるとする。Stanley (1984) は、校訂者はテキストを「復元する」というのではなく「改良する」といった校訂上の「落とし穴」を具体的に指摘し、保守的姿勢を支持している。

1990 年は本文批評、テキスト編纂にとって重要な年となった。マンチェスター大学で古英語テキストの編集に関するカンファレンスが開かれ、多様で新しい編集方針が提示された。保守派、介入派双方の主張が展開されているが、これを通して校訂に関する理論的議論のさらなる深化が促されていくことになる。O’Keeffe (1990) は写本テキストに見られる句読記号が 11 世紀初期から中頃において次第に増えていく傾向を見出し、これは写字生あるいは読者が書かれた詩に韻律を付けて読むことができなくなっていった結果、韻律上の分割を示す句読法を用いたのであると断言した。この痕跡を“residual orality”と呼んだ。また写字生が転写する際は写字生自身も書き換えを加えた“a participatory transmission”の伝統があったことを指摘し、写本コンテキストに深く注意を向けこれらの点を校訂法に反映させるべきという斬新な機軸を提案した。Lapidge (1991) は写本を重要視する保守的姿勢に対し痛烈な反論を掲げ、改めて古英語における校訂上の理論的議論の必要性を主張し、問題点を明確化した。この主張以後、本文介

入への傾向が強くなって行く。この時期、次の3著が特筆されるべきであろう。それらは、上記カンファレンスで繰り広げられた理論と実践に関わる論集の Scragg and Szarmach (1994)、個々のテキスト編纂上の問題に解決を施した Robinson (1994)、新しいテキストの校訂法の可能性を説いた論集の Keefer and O’Keeffe (1998) である。これらの書の主眼点は、テキストの本質と校訂本の目的（対象をどこに置くか）に基づいての編纂方法が考案されるべきということである。<sup>330</sup> Lapidge は 1993 と 1994 においても継続して 1991 の主張を繰り返している。Magennis (1994) は今後の ‘student edition’ はどうあるべきかを検討し、綴りの標準化の是非や本文修正の方法を教育的立場から再考している。O’Keeffe (1994) は古英語写本のテキストの ‘materiality’ が編集方針に及ばず影響を考察し、テキストを校訂することはその作品に関する criticism の範囲を限定してしまう危険性があることを警告する。Scragg (1994) は理論的本文批評がいまだに整っていないことを指摘し、Lapidge (1991) にならってその現状を是正しようとしている。Greetham (1995) の論集に収められた Hall (1995) は 1566 年の Matthew Parker から 1984 年の Vriend までの本文批評の歴史を概観した後で、これまで提示されてきた校訂の方法論に関する諸議論を総括し、折衷的な線を提案している。校訂における 2 派對立の姿勢に捉われることに警鐘を鳴らしたと言える。Szarmach (1997) も Hall と同じ見解にある。

次に近年の保守派に相對する急先鋒が Fulk である。校訂法における理論と客観的な方法論を確立するための根拠は、‘probability’ を与えてくれるものが必要であるとし、韻律の統計的基礎が本文修正の正当性を与えるもので、本文の乱れに関し積極的な介入を唱えている。Fulk (1996, 1997) が先ずその考察である。Donoghue (1997) はコー

---

<sup>330</sup> John D. Niles, *Old English Literature: A Guide to Criticism with Selected Readings* (Chichester: Wiley Blackwell, 2016), p.296.

パス研究の発達が正字法・語彙・統語面の新しいアプローチを広げ、また社会言語学や談話分析の手法を導入することにより、古英語の本文解釈に革新をもたらす可能性を説いている。Page (1997) は Lapidge (1991) が「古英詩の校訂者は作者よりも写本の ‘orthography, punctuation, pointing’ に意識が向きすぎている」と述べた事に異論を唱えている。そして O’Keeffe (1990) に触れながら、写本における視覚的情報 (spacing もその一つ) のさらなる入念な考察が本文批評とも関連して必要であることを指摘した。1998 年は Keefer & O’Keeffe 編による古英詩の編纂に対する新しい手法論集が刊行され、本文批評の議論がさらに活発化している。Irving (1998) は O’Keeffe (1990, 1994) が指摘した写本に見られる視覚的情報の重要性に注意を払い、同時に一連の Lapidge と Fulk の主張をも受け継いでいる。写本で変則的な読みに出会った場合に、どういう基準で修正すべきか、しないでおくか、4 段階のレベルを設定し実践的な方法を与えている。理論や原理原則から実践へという姿勢を示している。Doane (1998) は古英語の校訂本は現代の ‘textuality’ に沿ったものであることに異議を呈し、O’Keeffe (1990) の見解に賛同の意を唱えている。Scragg (1998) は *ASPR* に代わる決定版としてのテキストを提唱し、具体的な新しい編纂方針を与えている。特に *variorum edition* の作成を提唱する。Gneuss (1998) は Gneuss (1973) にて具体的には立ち入らなかった本文批評上に関わる複雑な緒問題や、本文修正に関する事柄を明確化することを旨としている。1973 年以降、本文批評の原則に関心が高まりつつある状況を考慮してのことである。現代と中世の句読法をどう折り合いを求めるかを始めとして、テキスト編纂において理論に捉われない実用的アプローチを推奨している。学問的ではあるものの読み易い校訂本で、極度に保守的に偏らず適切であると思われる場合は本文修正を拒まない姿勢である。

1999 年に Kevin Kiernan による *Electronic Beowulf* が出版された。Kiernan の編集方針は ‘ultra conservative’ である。同年の Caie (1999)

は保守派と介入派の極端な校訂指針の中庸を行く ‘electronic edition’ の出現を求めている。Orchard の *A Critical Companion to Beowulf* (2003) は *Beowulf* 研究の諸方面における成果を辿り今後の展望を示唆する体系的な評論集である。第2章の「写本とテキスト」を扱った最後の「推量による修正において（どのように優れているものであっても）近視眼的になりすぎてより広義な文脈を無視してしまうようであってはならない。すべての推量による読みは古英語の文体とテキストの構成に照らし合わせて慎重に執り行われるべきである」(p. 56) という見解は、校訂法に関する論議が白熱してきた状況下において校訂者が立脚すべき原点を再認識する上で時宜にかなった言及であろう。この後、かねてより本文校訂の原理原則を韻律に則った確率性という客観的な指針のもとに確立すべきであると主張してきた Fulk の論が集中的に大きく前面に登場する。Fulk (2003, 2005, 2007 (a), 2007 (b)) である。古英詩における頭韻、韻律のパターンはかなり規則性を保持し、その標準から逸脱している箇所は詩人の意図した詩的・芸術的効果が現れているので、本文修正は不必要であるといった見解には真っ向から異論を呈している。Klaeber の *Beowulf* (第3版, 1936) に影響を与えた保守派の Hoops や、意味が明確なら頭韻・韻律の不規則性は受け入れられるとした ‘ultra conservative’ の Kiernan (1999:2000) などへ強い批判を表明している。これら一連の考察が Klaeber’s *Beowulf* (第4版, 2008) に反映されている。Donoghue (2006) は改めて句読記号の問題に触れ、Muir (2006) は O’Keeffe (1990) に視点を当てつつ、写字生と修正者が写本にかなりの変更を行っていたことに触れ、近年の ‘codicology’ と ‘paleography’ の立場からの写本分析がこれまで気づかなかった新しい本文変更を発見してきたことを認めている。Liuzza (2006) は理論に深く立ち入るのではなく、テキスト編纂の実践を数項目掲げ、写本コンテキストに沿ったテキスト作成を目指し、その折に編纂・校訂上の実践が一定の共通原則を持つことを求めている。Treharne (2009) は写本の ‘textuality’ の問題に焦点を置き、

中世期において「テキスト」とはどのような要素から成り立つものであったのか、大きな時代的コンテクストを通して解釈し直すことを経て、ようやくテキスト編纂の方法論構築の出発点に立つことができるとする。Terasawa (2011) の韻律を重視した本文修正の姿勢も、Fulk らの主張の一線上にある。Neidorf (2013, 2016, 2017) も Fulk の主張に沿ったもので、特に Sievers (1893) の体系的な古英詩の韻律理論を本文批評に適用することの再主張である。“(U)nmetricality is a sign of scribal error.” (Neidorf, 2016, p.53) という視点を保持し、本文修正の正当性の客観的根拠としている。

唯一の写本しか残されていない場合の古英語のテキストの取り扱い、写本の読みをできる限り保持するという保守的姿勢が主流を占めてきた。しかしながら近年では本文修正の原理原則の基準を韻律・頭韻に求める本文介入派の台頭を見て取ることができる。また「写本の話」だけに目を向けるのではなく、‘manuscript context’ や ‘textuality’ という観点から、「写本・テキストを構成するものが一体何であるか」を問題に掲げ大きな中世という文化的コンテクストの中で写本・テキストを再確認する論考もなされている。Treharne (2009) が指摘する、“the postprint and hypermedia era”(p.1) へと移行するに当たって新しい本文批評の方法論も求められるであろう。保守派、介入派という2派対立で捉えていくのではなく、理論や新規の観点の導入を尊重しながら複合的な視点が求められるところである。今後の *Beowulf* の本文批評と新たな校訂本編纂の可能性があるとすれば、このような新しい潮流の中で議論されていくことであろう。ただ忘れてはならないことは、「フィロロジカル」な写本テキストの読みに絶えず立ち返ることである。これこそが本文批評の原点だからである。

(完)